



## 「インスピレーションになろう」 BE THE INSPIRATION

2018-19年度 RI会長／バリー・ラシン RI.D2590ガバナー／金子 大 横浜旭RC会長／市川 慎二

国際ロータリー第2590地区

### 横浜旭ロータリークラブ

事務所 横浜市旭区二俣川1-37-3 NJTS1階／〒241-0821  
TEL.045-465-6702／FAX.045-465-6712  
http://yokohamaasahirc.cho88.com

Email:asahirc@titan.ocn.ne.jp

例会会場 横浜市旭区二俣川1-45-30工藤ビル  
(株岡田屋3階会議室)

例会日 毎週水曜日／12時30分～1時30分



被災地の子ども達にXマスプレゼント



チャリティーコンサート



ガールスカウトとクリーン作戦

2019年4月3日 第2377回例会 VOL. 50 No. 36

■司 会 SAA 北澤 正浩

■開会点鐘 会 長 市川 慎二

■齊 唱 君が代、奉仕の理想

#### ■出席報告

会員数	30名	本日の出席数	24名
本日の出席率	85.71%	修正出席率	92.31%

#### ■本日の欠席者

青木、二宮（登）

#### ■他クラブ出席者

二宮（登）（神奈川東RC）、  
佐藤（真）、大川、北澤、田川、五十嵐、  
安藤二宮（麻）新川、目黒（地区協議会）

#### ■ビジター

柳沼 芳光様（横浜瀬谷RC）

#### ■ゲスト

緒方 文子様（県立がんセンター医療福祉相談室  
医療福祉ソーシャルワーカー）

#### ■4月誕生記念祝



斎藤 善孝会員

4.29

#### ■会長報告

皆様、こんにちは。全国の桜が続々と満開となり、お花見シーズン真只中となりました。私の園の周りの桜も綺麗に咲いていますが、お花見に行かれた方も多いのではないのでしょうか。

さて、4月となり、ロータリークラブでは母子の健康月間です。毎年、5歳未満で命を落とす子どもは、世界で推定590万人といわれ、その原因は栄養失調、適切な医療や衛生設備の欠如などです。しかし、十分な支援活動さえできれば、予防が可能なものばかりです。

ロータリーでは、母と子の命を救うための取り組みを、世界中に広げておりますが、現在、がんの予防を踏まえ、可動式がん検診支援として、インドにおける可動式のがん検診機器一式の提供と認識向上を目的とした研修の実施支援もロータリーでは行っています。その中で「母親が強く健康であれば、その家族も強く健康になる」こんなメッセージが書かれており、まさに、心も身体も健康でなければならぬと感じた一言でした。

今、2人に1人は、がんになると言われていますが、若くして、がんと向き合わなければ、ならない人、子どももいます。本日は、県立がんセンター緒方様より「がん患者を親に持つ、子ども達について」というテーマで、母子の健康についての卓話を頂きます。どうぞ宜しくお願い致します。

## ○地区関係

1) 2020 - 21 年度、ロータリー平和フェロー候補者募集要項が届いております。候補者がいれば、お知らせください。

2) 横浜中 RC より、創立記念事業として、第 4 回、障がい者の作品展開催の案内が届いておりますので、回覧致します。

## ○クラブ関係

1) 次週より、須藤会員の後任である、佐藤二郎さんが入会、例会に出席されます。皆様で大歓迎の雰囲気の中、お迎えしましょう。

### ■ガバナー補佐 増田会員より

次年度ガバナー補佐柳沼さんを紹介いたします前に 2 点、お話をさせていただきます。

1) 第 5 グループの次年度以降のガバナー補佐と青少年交換ホストクラブの順番が決まりました。当旭クラブは両方とも担当まで年数があるようですが、まとめるのに苦労しましたのでご協力をお願い致します。

2) IM への多数の出席にお礼を申し上げます。第 5 南グループの参加もあり、講師の演説も面白く、大いに盛り上がりました。忙しい中をご出席いただき感謝いたします。

それでは、瀬谷 RC との合同例会でもご紹介しましたが、改めて正式に次年度のガバナー補佐柳沼芳光さんをご紹介いたします。



左：増田会員 右：柳沼会員

### ■柳沼 芳光様より

皆様、こんにちは。本年 7 月より来年 6 月まで、第 5 グループガバナー補佐を務めさせて頂く事になりました。これから一年間、地区とクラブのパイプ役として務めさせていただきますので、宜しくお願いします。

ガバナー補佐の主な役割は、

- ①ガバナーを援助することによって、担当するクラブの効果的な運営をサポートする。
- ②地区目標の設定を援助する。
- ③ガバナーのクラブ公式訪問のスケジュールを調整する。

④クラブの強みと弱み、目標に向けた活動の進捗をガバナーに伝える。

⑤地区の行事と活動に参加する。

⑥地区チーム研修セミナーに出席する。

会長エレクト研修セミナー (PETS) と地区研修・協議会に出席する。

⑦将来リーダーとなれる人材を探し育成する。

⑧クラブの状況について次期ガバナー補佐に情報を提供する。

⑨定期的にクラブと連絡を取り、活動状況を提供する。

⑩クラブ会長エレクトが目標を設定してロータリークラブ・セントラルに入力し、これらの目標を達成できるよう援助する。

⑪招かれた場合はクラブの例会、協議会、その他の行事に出席する。

⑫クラブを支援するための具体的なアイデアを地区リーダーシップに提案する。

⑬地区大会やその他の地区会合への出席をお願いする。

### ■創立 50 周年記念事業実行委員会より

委員会を以下の日時に開催いたします。

日時 4 月 17 日(水)例会終了後

場所 例会場

議題 事業計画承認の件

①記念事業について

②記念式典・祝宴について

③その他提案事項について

### ■情報集会報告

B・C グループ 出席者 (会員敬称略)

増田、太田、北澤、市川、二宮登、二宮麻理子、佐藤真吾、内田、吉原、青木、五十嵐

1) 体験例会について

・体験例会で入会する人はいないので。

・体験例会後に懇談会を行うなどして柔らかい雰囲気にする。

・体験例会をきっかけにする。

・会員の入会の動機のアンケートをとる。

2) 増強出来ない理由

・何をしているのかよくわからない。

・敷居が高いと感じているのではないか。

・出席が難しい。

### ■ニコニコ BOX (会員敬称略)

柳沼芳光様 (横浜瀬谷 RC) / 本日は増田ガバナー補佐に連れられてご挨拶にまいりました。次年度ガバナー補佐を務めさせていただきますので、一年間宜しくお願い致します。

市川 慎二 / ①緒方文子様、本日はお忙しい中、お越し頂き有難うございます。卓話宜し

くお願い致します。②次年度ガバナー補佐柳沼様、ようこそお越しくださいました。

安藤 公一／①緒方様、ご多用中にもかかわらずお出で頂きありがとうございます。卓話宜しくお願い致します。②柳沼次期ガバナー補佐ようこそ。来期は宜しく申し上げます。③3/31の地区協議会ご参加の皆様、お疲れ様でした。

斎藤 善孝／①緒方文子様、本日の卓話宜しく申し上げます。②柳沼様、ようこそ。③誕生日祝いを有難うございます。古希を迎え益々元気が出てきました。

北澤 正浩／①緒方文子様、卓話よろしくお

願い致します。②ワイフにお花をいただき有り難うございました。③柳沼さん、ようこそ。増田嘉一郎／次年度ガバナー補佐、柳沼さんを紹介します。残る今年度を含めて二人共、宜しく申し上げます。

大川 伸一／①本日は当県立がんセンターのがん相談をしています緒方さんの卓話です。皆様、宜しく申し上げます。②柳沼さん、ようこそ。先日は研修の講義をありがとうございます。

吉原 則光／緒方様、ご多用のところ卓話いただき有難うございます。有益なお話拝聴させていただきます。

五十嵐 正／①緒方様、本日はお忙しい中ありがとうございます。卓話よろしく申し上げます。②柳沼さん、次年度ご指導宜しく申し上げます。

内田 敏／①緒方さん、お忙しい中お出で頂き有難うございます。本日の卓話よろしくお

願い致します。②次年度ガバナー補佐柳沼様ようこそ！兵藤 哲夫／①柳沼様、ようこそ。来年度お世話になります。よろしく申し上げます。②元号「令和」書き方がいろいろあって私自身迷っています。③来週は私の久々の卓話になります。皆様欠席のないように！

佐藤 利明／①がんセンター緒方文子様、本日の卓話よろしく申し上げます。②瀬谷RC柳沼次年度ガバナー補佐、ご苦勞様です。

太田 勝典／柳沼さん、ようこそ。次年度はご苦勞様です。

倉本 宏昭／①がんセンター緒方様、本日の卓話よろしく申し上げます。②柳沼様、1年間ご苦勞様です。よろしくお

願い致します。柳沢 哲也／昨日、自然公園で花見をしました。若干寒かったですが、駐車場もずっと満

車で、大盛況でした。

佐藤 真吾／①緒方様、本日はお忙しい所当クラブ例会にお越し下さり有り難うございます。卓話よろしくお

願い致します。②柳沼次年度ガバナー補佐ようこそ。お手柔らかにお願いします。③先日の地区研修・協議会にご参加いただいた皆様、お疲れ様でした。

■卓話「親ががんである子どものサポート」  
緒方 文子様



私は、神奈川県立がんセンターのソーシャルワーカーの緒方文子と申します。

当院は、成人を対象にしておりますが、この3月は週末で患者さんが誰もいない病院に、子どもたちの笑い声やにぎやかな話声、そして走り回る足音が響き渡りました。その理由は…神奈川県で初めて「親ががんである子どものサポートグループ」を開催したからです。今日は、がん患者を親にもつ子どもたちのサポートについてお話したいと思います。

2015年11月に、国立がん研究センターはプレスリリースを発表しました。その内容は、18歳未満の子どもをもつがん患者とその子どもたちについての報告でした。日本で新たにがんと診断される方は、約86万人です。その86万人中、18歳未満の子どもがいるがん患者さんは56,000人です。その56,000人の方には87,000人のお子さんがいらっしゃいます。子どもたちの平均年齢は11.2歳です。そして半数以上は12歳以下の小学生のお子さんであることがわかったのです。レポートでは、がんの宣告は、患者自身に加え、家族、特にその子どもたちにも大きな影響をあたることが知られていること、多方面から十分なサポートを受けながらより良い療養生活とその後の人生を送ることができるようサポート体制が必要であるとしています。

それでは、がんの親をもつ子どものサポートとはどのようにすればよいのでしょうか。四国がんセンターの臨床心理士の井上さんが



先行研究をまとめていらっしやいますので引用させていただきます。

先行研究では、「親の病気について知らされている子どもの方がそうでない子よりも心的外傷後ストレス症状が軽い」、「親ががん患者である子どもは不安や気分の落ち込みを経験している率が高い」「親の死が差し迫り、避けられないことを事前に知らされていた子どもは、そうでない子どもよりも不安度が低い」「親に関する子どもの不安について話し合うことは、不安を高めるのではなく疎外感を軽減する。」「思春期の子どもは両親と病気や死についてオープンに話し合うことに価値を見出す。それが親との死別の際の助けになる。」とあります。

このように、親の病気について子どもに伝えることが子どもたちにとって、大変大切であることが分かります。

また、世界の25の主要がんセンターのNPO団体であるNCCNの2014年の円卓会議では、「親ががんにかかった時の子どもの経験」という議題で話し合われた結果、「子どもの年齢と気質に適切な正直なコミュニケーションが不可欠である」と結論づけられています。当院でも患者さんが自分の子どもにがんであることを伝えることを、サポートすることになりました。

子どもへの伝え方について参考にしたのは、がんになった親をもつ子どものサポートに取り組んでいる日本のホープツリーというNPOが作成したリーフレットです。テキサス大学MDアンダーソンがんセンターのプログラムを参考に親のがんを子どもにどう伝え、支えていくかについてまとめてあります。

テキサス大学MDアンダーソンがんセンターのプログラムでは、子どもへ病気を伝えるときに、3つの事を念頭に置くことを提案しています。①がんという病気②伝染しない③あなたのせいではない ということです。

まず、それは、「がんという病気」ということですが、がんと言わずに、病気というあいまいな表現をすると、子どもは想像をふくらませて不安や混乱をおこすことにもなります。がんという言葉を使い、風邪のようにすぐに治る病気ではないことを知らせることが大切とされています。

次に、それは「伝染しない」ということですが、子どもは風邪のようにうつる病気だと思っていて不安に思っていることがあります。

**私はがんです。そして、私には子どもがいます。**

### 3つのCを念頭に置く

- ・それはCancer(がん)という病気。
- ・それはCatchy(伝染)しない。
- ・そのCaused(原因)は、あなたや私がこれまでしてきたことも、しなかったことも、全く関係ない。

がんであるお母さんと手をつないでも、お母さんと同じアイスクリームを食べてもうつらないと説明する必要があります。

最後は「その原因は、あなたや私がこれまでしてきたことも、しなかったことも、全く関係ない」ということですが、子どもは、特に、7,8歳くらいまでの子どもの特徴として、「自己中心性」が挙げられます。「自己中心性」とは、「エゴイズム」とは異なり、自分の視点からしか世界をとらえられないことです。自分が悪いことをしたから、いい子にしていなかったから、お母さん、お父さんががんになってしまったと思ひ込むことがあるので、あなたのせいではないことをきちんと説明することが大切です。

当院でも、患者支援センターでは、「お子さんに病気のことを伝えるかどうか悩んでいますか」というポスターを院内に掲示しました。また、多くのがん関係の資料を置いている情報コーナーの一角にも子どもへの伝え方をまとめた資料を配架していました。ポスターや資料をみて患者支援センターに相談に来してくれる患者さんには、子どもの発達段階や性格などを聞きながら、子どもに病気のことをどう伝えるかを一緒に相談することができるようになりました。しかし、相談件数はあまりありませんでした。私たちは、情報が欲しいと考えている患者さんや、子どものことで悩んでいる患者さんに情報を届けられていないのではないかと考えました。病院で子どもの相談ができるとは、考えないかもしれません。

そこで、私たちは、がんの親をもつ子どものサポートグループを開催したいと考えました。このサポートグループはクライムプログラムといいます。ソーシャルワーカーの大沢さんと臨床心理士の小林さんが、2010年にアメリカでクライムプログラムの研修を受け、ファシリテーターの資格を得て日本にプログラムを持ってきてくれました。米国の主要ながんセンターや病院の約70の施設において開

催されています。また、日本やアイルランド、オーストラリア、香港などでも開催されています。

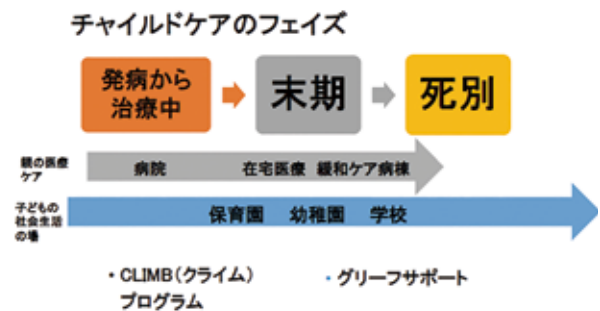
このプログラムに参加するためには、親ががんであることを知らされている必要があります。対象は、小学生の子どもです。一週間に1回、2時間のセッションを4回行います。定員は、5, 6名です。このプログラムが大切に行っていることは、3つあります。まず、子どもたちの中に共通点を見出して孤立感を軽減すること、工作や絵をかいたりすることで気持ちを発散すること、そして、子どもどうしの仲間のつながり、親子・家族の絆をつくることです。

今回、この3月に当院でもこのプログラムを開催しました。私たちには予算がなかったため、神奈川県立病院がん基金の研究費を申請して、院内倫理委員会の承諾を受けて開催しました。そして、5人のほんとうにかわいい子どもたちと、2人の幼い子どもたちがゲストで参加してくれました。

このクライムというプログラムの具体的な内容を簡単にお伝えすると、毎回、扱う感情があります。幸せ、混乱、悲しみ、不安、怒りです。そして、その感情をよく理解するための工作を行います。

1回目に扱う感情は、不安です。工作は「強さの箱」といって、白い箱に自分の強さを感じられるような切り抜きを貼ったり絵を描いたりして装飾をします。次に、小さな紙に不安に思っている事を書いて、箱の中に入れておきます。この工作によって、子どもたちは、自分の強さで不安なことには対処できること、箱に入れておくことによって不安な気持ちが前よりも弱まることがイメージできるようにします。学校の先生に相談する時は、箱を別の場所に持っていけるので、それまでは箱の中に閉まっておけることを伝えます。この工作によって、こどもが強さと不安を融合させることを手助けします。

子どもたちが不安に思っている事に何を書いたか、発表してもよい子には発表してもらいました。子どもの一人が「お母さんががんで死んでしまうこと」と教えてくれました。みんな同じことを紙に書いていました。気持ちを口にだしたり、同じ気持ちのお友達がいることがわかると、気持ちが少し楽になると思います。そして、不安について話し合い、どうすればよいか対応方法を考えます。みんな



## 子どもたちが学んでいる事

親のありのままの姿を見る時	無条件の愛
家事を手伝っている時	チームワーク
自分でなんとかやっていく時	自足・自立
親の病状の一進一退に対処する時	粘り強さ・レジリエンス

な、お母さんとお話すると言っていました。

2回目に扱う感情は、混乱です。病気のことをよく知らないと混乱した気持ちになるので、がんについてよく知らないう回です。この回では、まず、がんについて学ぶDVDを見ます。がんは移る病気ではないこと、誰のせいでもないこと、がん細胞について、治療方法として抗がん剤、放射線治療、手術について学びます。抗がん剤の副作用について脱毛やだるさなどについても学びます。子どもたちは、「お前のお母さん、髪抜けた?」「うちも抜けた。バサッと抜けたよ、面白かった」などと隣のお友達と話しながら見ていました。次に、キワニスドールに絵を描いたり、色を塗ります。そして、そのキワニスドールに抗がん剤治療に見立てて、中身は水ですが、本物の針を使って点滴治療をします。「ほら、針は最初はチクッとするけど、柔らかいんだよ。痛くないよ」とお話しながら行います。

最後の回は、がんのお母さんやお父さんにお見舞いカードを作ります。カードをもらう人が好きそうな絵やシールを貼ってねということ、自分は絶対選ばないような可愛いうさぎや猫のシールや切り抜き、お菓子のシールなどを一生懸命探して飾っていました。お見舞いカード作りが終わると、おいしいお料理やケーキを用意して、全員でさよならパーティを行います。親も子どもたちにカードを書いたので、子どもたちとカードを交換します。親も子どもたちも、とても嬉しそうでした。子どもは親からのカードを閉まっては開けてみて、何度も繰り返して見ていました。

子どもたちが工作をしている時、親は親の

グループでお話をします。そのグループでは、子どもがいるがん患者さんと話したことがない、幼い子どもを育てながら、働きながらの通院が大変であること、子どもを預けて通院をすることが大変、など子どもをもつがん患者ならではの悩みが語られていました。

ここで、クライムプログラムに参加した感想をご紹介したいと思います。子どもたちは、みんな、楽しかった、うれしかったと書いてくれました。中には、クライムに参加する前はなんで自分のお母さんだけががんになったのかなと思ったけどクライムに参加した後はぼく以外にもお母さんお父さんががんの人がいっぱいいると思いましたと書いてくれた子どももいました。親のアンケートでは、子どもに関しては、がんに対する勉強ができてよかった、がんになったのは食べ物のせいではない、誰のせいでもないことがわかったようでよかった、子どもがつらいのは自分ひとりだけではないことが分かったことがよかった、自分と同じがんの親を持ったお友達ができたのがよかったと書いてくださいました。患者さんの立場としては、多くの方が、子どもを持つ親同士で話ができたと書いてくださいました。

また、家族の話し合いのきっかけになった、前向きになった、同じような経験をされている方にもこのプログラムを知ってもらえたらいいなと思う、子どものためのプログラムがなかなかないのでこれからどんどん増えていってほしい、と書いてくださいました。

がん患者さんは、孤独を感じやすいと聞きます。静岡県立がんセンターが2013年に調査した「がんと向き合った4,054人の声」によると、がん体験者が悩みをやわらげるために必要な情報や支援として希望している事は、相談窓口や話を聞いてくれる人でもなく、圧倒的に、『体験者や同病者との交流』でした。

私たちは、当院でも継続してこのプログラムを開催して、子どもたちや家族、患者さんに場を提供することができるよう病院に働きかけていきたいと感じました。

最後に、私たちが考えるがんの親をもつ子どものサポートの今後の展望について少しお話ししたいと思います。子どものサポートには段階があります。発病から治療期、そして、大変残念ながら、終末期、死別という段階を踏む可能性もあります。当院で始めたがんの親をもつ子どものサポートは、発病から治療

期の親をもつ子どものサポートにすぎません。がんセンターは治療期の患者さんが通われている病院なので、がん治療が終了すれば、患者さんは住み慣れた地域で訪問診療の先生や訪問看護師、ケアマネージャー、介護士などのサポートを受けながらご自宅で終末期を迎える方も多くなってきました。在宅医療のチームは力強く温かいスタッフばかりなので、子どもたちもサポートを受けていると思います。そして、子どもたちの社会生活の場である保育園、幼稚園、学校の先生方も気にかけてサポートして下さっていると思います。

けれども、地域に大切な人を亡くした子どもたちが集まり一緒に遊んだり、おしゃべりをしながら「ひとりじゃない」と感じるのできる場があればもっと良いのではないかと思います。このような場をグリーフサポートステーションといいます。神奈川県にはありませんので、がんセンターのある旭区にすることが目標です。がんセンターには、多くの緩和ケアのスペシャリストがいますので、グリーフサポートステーションが地域にあれば、地域貢献もできるのではないかと思います。

子どもたちにとって、親のがんは大変つらい体験だと思います。しかし、辛い経験からも多くのことを学んでいく力ももっています。NPOのホープツリーでは、子どもたちが学んでいる事について公開しています。

親がぎりぎりの状態で頑張っている姿に接するときは柔軟性、親の特別なニーズを尊重しているときは寛容、親のお世話をするときには思いやり、親がゆっくりとしか動けないため待つ時は忍耐、親のありのままの姿を見るときは無条件の愛、家事を手伝っている時はチームワーク、自分で何とかやっていくときは自立、親の病状の一進一退に対処するときは粘り強さを、学んでいるとのことです。

当院ではがんの親をもつ子どものサポートを始めたばかりです。私たちは、子どもの力を信じてがんの親御さんとともに、子どもたちに寄り添っていけるようなサポートを作っていきたいと思っています。これで私のお話は終わりです。本日は、お時間を頂きありがとうございました。

#### ■次週の卓話

4/10(水) 高城 礼子様

(スマイルコンシェルジュ)

週報担当 倉本 宏昭